34号
平成19年１月発行

北海道がんセンターたより

独立行政法人国立病院機構　北海道がんセンター
〒003-0804 札幌市白石区菊水4条2丁目3-54
TEL 011-811-9111
ホームページ　http://www.sap-cc.org

編集発行人:山下 幸紀

北海道がんセンターの理念

私たちは、国民の健康で幸福な生活のため、最新の知識と医療技術をもとに、良質で信頼ある医療の提供に努め、特に「がん克服」に寄与することを目指します。このため、

■常に、医療の質と技術の向上を目指します。
■研究、教育研修を推進し、医療･医学の発展に寄与します。
■患者さんの権利を尊重し、誠実な医療を実践します。
■自主自律、創意工夫の精神で病院運営に当たります。

独立行政法人となって3年

院長　山下　幸紀

皆様、新年あけましておめでとうございます。当院も、独立行政法人化し、病院名も、北海道がんセンターとなって３年が経過しようとしておりますが、平成22年には、救命救急センターが、西札幌病院の後にできる北海道医療センターに移転することになりました。さて、昨年８月には、がん対策基本法が国会で成立しました。当院は、以前から、全国がん（成人病）センター協議会の構成施設として、協議会の事業の一翼を担って参りましたが、さらに、がん医療水準の均てん化を達成するための政府の２大政策、すなわち、がん診療連携拠点病院の整備、がん対策情報センターの整備についても、具体的な成果をあげつつあります。まず、第一回目のがん診療連携拠点病院の指定を、平成17年１月にうけ、北海道の、他の７施設と、互いに協力し合いながら診療することとしており、既に２度会合を開き、種々の情報を交換しております。２月には、さらに、実務者が集まり、院内登録についての会合を持つ予定にしております。また、昨年10月、国立がんセンター中央病院に、がん対策情報センターが新設され、がん対策に関連する様々な情報の収集、分析、発信を始めておりますが、これと連動し、また当院独自の観点から考え、本年４月１日から、‘がん相談支援情報室’を開設することにいたしました。この情報室は、西尾副院長が室長となり、相談支援係として、メディカルソーシャルワーカー（MSW）、副看護師長が、情報管理係として薬剤師が、また地域医療連携係として、従来の医療連携室の２名が担当することになっており、さらに札幌がんセミナー理事長の小林博先生を顧問におむかえしており、患者さまだけでなく、病院としても色々な面からご指導いただくことにしております。私たちは、がんに関連するあらゆることを、患者さまの為に成し遂げるつもりでおりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

－CONTENTS－
もくじ

独立行政法人となって３年……院長　山下　幸紀……1
緩和医療患者のＱＯＬ推進講習会報告……副院長　西尾　正道……2，3
災害医療従事者研修に参加して……企画課　専門職　坊山　光良……3
クリスマスパーティーを終えて……小児科乳腺外科病棟　伊藤　綾……4

緩和医療患者のQOL推進講習会報告

副院長　西尾　正道

緩和医療患者のQOL推進講習会が平成18年11月18日（土）午後に札幌コンベンションセンターで開催された。この講習会は毎年年末に厚生労働省と財団法人がん研究振興財団より後援を頂き開催している。昨年までは「末期医療患者のQOL推進講習会」と題して開催していたが、緩和医療は必要があればがん治療の初期の段階から考慮されるべき医療であるという考え方が定着したため、本年度より「緩和医療患者のQOL推進講習会」と名称を変え、「がん緩和治療患者への優しい医療の流れ」というテーマで講演会を行った。

まず当院の緩和ケア診療科医長　岩波悦勝先生から「緩和ケアチームを立ち上げて～ 現状と今後の課題～」と題してお話があった。当院は緩和ケア病棟を持たないが、2006年４月より緩和ケアチームを立ち上げ活動を開始している。構成メンバーは、麻酔科医師１名、がん性疼痛看護認定看護師１名、薬剤師４名である。緩和ケアチームの現在の状況とこれからの課題について報告された。

また当院の高田慎也薬剤師より「緩和ケアチームにおける薬剤師の関わり」と題して薬剤師の立場から緩和医療での活動内容の報告があった。がん性疼痛は患者全体の６割以上を占めているという報告があり、主に鎮痛薬剤の問題点や妥当性の検討、適切な情報提供、院内スタッフへの教育・啓蒙などが重要な活動であると報告された。

特別講演は「緩和ケアの広がりに向けて～ 緩和ケア病棟から一般病棟・在宅へ～ 」と題して、本家好文先生(広島県緩和ケア支援センター長)から講演を頂いた。がん診療連携拠点病院の要件に、緩和医療の充実が求められている。がんに伴うさまざまな苦痛を緩和し、ひとり一人がその人らしく人生の終末を迎えられるように支援する緩和ケアは、その必要性が強く認識されるようになってきた。従来は緩和ケアは緩和ケア病棟を中心に行うと考えられてきたが、多くの患者さまが恩恵を受けるためには、一般病棟や在宅ケアにおいても緩和ケアが実践できる体制の構築が必要である旨の報告がなされた。そして実際の広島県下での在宅緩和ケアの活動について講演された。参加した約350人にとって有意義な講演会であった。

災害医療従事者研修に参加して

企画課　専門職　坊山　光良

平成18年11月６日～９日の４日間、災害医療センターに於いて、全国の国立病院機構災害拠点病院を含めた18施設を対象にして行われた災害医療従事者研修に参加してきました。

当院は、医師１名、看護師２名、薬剤師１名、事務職１名の計５名で構成されている災害救助班での参加となりました。

研修は、『災害医療概論』の講義に始まり、『トリアージ』や『エマルゴトレーニング』の実習など全19講義が行われました。

研修中は、災害に対する認識のあまさを痛感させられました。例えれば、当院でも災害用備蓄はしているものの停電等により人力で運ぶことになったら・・・高層階においてある食料品やベット等の移動は？・・・大変だろうな、いや果たして動かせるのだろうか？、あるいは、トリアージの実施・・・ところで、当院のトリアージタッグはどこにあるの？などです。

さらに、災害時病院での多数患者受入の連絡体制のみの実習においても、各関係部署に連絡するのみであるにもかかわらず、最後は右往左往する状態に陥ってしまい、本来なら、これに患者の診療やライフラインの確保などしなければならず、実際の災害ならと思うとやはりゾッとするものを感じました。

今回の研修は、災害そのものの認識や災害拠点病院としてのあり方などを再認識する良い機会でした。

（最後に）・・・

研修中の11月７日に、佐呂間町で竜巻被害が起こりましたが、皆さん、そのニュースを見てどう思いましたか？・・・札幌でなくて良かった、被害に遭われた方はかわいそうに、竜巻って怖いね、等々

・・・明日は我が身かもしれません。皆さんも今一度、災害に対して考えてみませんか。

クリスマスパーティーを終えて

小児科乳腺外科病棟　伊藤　　綾

12月４日、わたしたち２階小児科乳腺外科病棟では、少し早いクリスマスパーティーが行われました。

きれいに飾りつけた大講堂で、みんなとテーブルを囲んで食べた食事はとてもおいしく、普段は食の細い患者さまも、このときばかりはたくさん食べており、後でおなかが痛くなるのではないかとヒヤヒヤしていました。給食の方からも協力を頂き、メニューは患者さまの大好きな卵焼きやナポリタン、いなり寿司やから揚げ、大きな丸いケーキなどを用意していただきました。

おなかがいっぱいになったところで、いよいよアトラクションのスタートです。今回は、藤女子大学パレットＡのみなさんが、ペープサートとハンドベルを披露してくださいました。ペープサートでは「あわてんぼうのサンタクロース」の曲に乗せて、楽しいサンタクロースのお話をしてくださいました。ハンドベルでは、「きよしこの夜」、「アンパンマンマーチ」、「星に願いを」の３曲が演奏されました。とてもきれいな音色で、患者さまもスタッフもみんながうっとりと聞き入っていました。

ビンゴゲームでは大人も子供もうれしい景品がたくさん並び、早くビンゴにならないかと、ドキドキしながらゲームが進んでいきました。見事に１位に輝いたのは小児科の長先生！先生はひときわ大きな羊のまくらをゲットしていました。皆さん、欲しい景品は貰えたのでしょうか・・・？

ビンゴの後は師長杯じゃんけんゲームです。大人チーム、お母さんチーム、子供チームに分かれ、それぞれ師長とじゃんけんをする簡単なゲームでしたが、こちらにも豪華商品が用意されており、とても盛り上がりました。

楽しかったゲームが終わると、突然窓をドンドンと叩く音がしたので開けると、なんと、大きな荷物を抱えたサンタクロースが現れました！突然現れたサンタクロースに、子供たちも大人もびっくりしていました。クリスマスにはまだ早いですが、今年一年間良い子にしていた子供たちのために、たくさんのプレゼントを持ってきてくれたようでした。サンタクロースに一人ひとり名前を呼ばれ、プレゼントを取りに来る子供たちは、嬉しいのと恥ずかしいのが混ざりあい、はにかんでいました。中には、初めて見る真っ白なひげのサンタクロースに驚いて、泣き出してしまう子や、テーブルの下に隠れてしまう子も・・・。それでも貰ったプレゼントでは楽しく遊んでいるようでした。大人の患者さまは、「いい子にしていたら来年はプレゼントもらえるかな・・・」とおっしゃっていました。サンタさん、来年は大人の方にもプレゼントをよろしくお願いします！